

[成果情報名] ヤブツバキ断幹後の生育状況

[要約] 強度断幹区（100%断幹）・断幹高 1 m（中度断幹区）が、当年枝数が最も多く、樹高成長・樹冠幅の成長が最大でツバキ林の育成に有利である。

[キーワード] ヤブツバキ、断幹、高生産性

[担当] 農林技術開発センター・森林研究部門

[連絡先] 電話 0957-26-3330

[区分] 林業（特用林産）

[分類] 指導

[背景・ねらい]

樹高が高く実の採取が困難なツバキ林を、樹高の低い高生産性のツバキ林へ誘導するための技術を開発するため、断幹を行い断幹率及び断幹高と樹冠の形成状況及び当年枝数等との関係を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 強度断幹区（100%断幹）は、当年枝数が最も多く発生し、断幹木の早期結実に有利である。（図 1）
2. 強度断幹区（100%断幹）は、樹冠幅の成長が最大で、断幹木の早期樹冠形成に有利である。（図 2）
3. 中度断幹区では、断幹高 1 m が樹高成長が最大で、断幹木の早期樹冠形成に有利である。（図 3）
4. 強度断幹区では、断幹後 4 年目で初めて結実が見られる。（表 1）
5. 中度断幹区（25%断幹）で、残存木の結実数が増加する傾向が見られる。（表 1）

[成果の活用面・留意点]

- ・地際（断幹高 0 m）で断幹すると、再生しない場合があるので注意する。
- ・強度断幹区では、ツル類が繁茂するので、駆除を心がける。
- ・ヤブツバキは、当年枝の先に花を着けるので、当年枝数を結実のバロメータとしている。
- ・断幹率とは、成立本数の内断幹したヤブツバキの割合である。

[具体的データ]

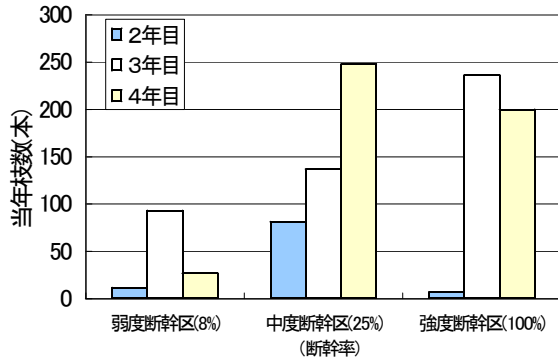


図1 断幹後の当年枝数の変化

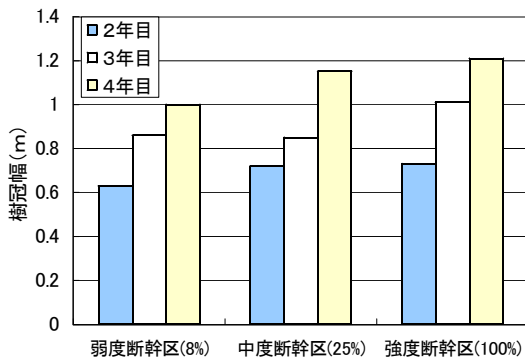


図2 断幹木樹冠幅の推移

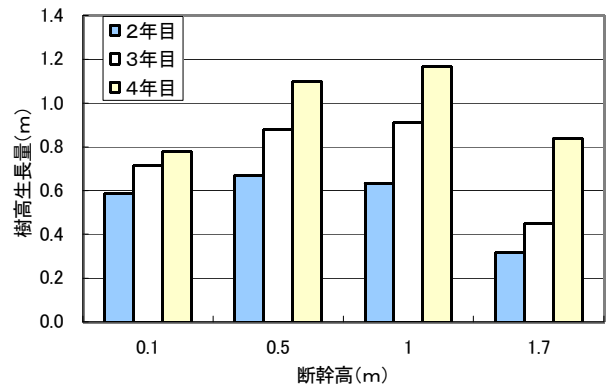


図3 断幹高別にみた樹高成長量の変化【中度断幹区(25%)】

表1 断幹試験区におけるツバキ実の結実数

試験区(率)	採取年[AD]	残存木	断幹木	総計	備考
弱度断幹区(8%)	2005 [実施年]	521 (9.5)	0 (0.0)	521	残存木
	2006 [1年目]	43 (0.8)	0 (0.0)	43	55本
	2007 [2年目]	24 (0.4)	0 (0.0)	24	断幹木
	2008 [3年目]	321 (5.8)	0 (0.0)	321	3本
	2009 [4年目]	-	0 (0.0)	-	試験区: 15m × 15m
中度断幹区(25%)	2005 [1年目]	447 (4.1)	0 (0.0)	447	残存木
	2006 [2年目]	47 (0.4)	0 (0.0)	47	110本
	2007 [3年目]	1,980 (18.0)	0 (0.0)	1,980	断幹木
	2008 [4年目]	698 (6.3)	0 (0.0)	698	34本
	2009 [5年目]	1,575 (14.3)	2 (0.1)	1,577	試験区: 20m × 20m
強度断幹区(100%)	2005 [実施年]	0	0 (0.0)	0	残存木
	2006 [1年目]	0	0 (0.0)	0	0本
	2007 [2年目]	0	0 (0.0)	0	断幹木
	2008 [3年目]	0	0 (0.0)	0	28本
	2009 [4年目]	0	20 (0.7)	20	試験区: 10m × 10m

()内は1本当たり結実量

[その他]

研究課題名：ツバキの新機能活用技術及び高生産性ツバキ林育成技術の開発

予算区分：国庫

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：田嶋幸一 久林高市 副山浩幸